

研究プロジェクト名

ジェンダー・ストレス・モデル構築のための
文理複合的研究Joint Study by Social and Physical Science Groups for the
Establishment of Gender Stress Model (Ⅲ)

医学部保健学科・教授

後 藤 節 子
Setsuko Goto

ごとう せつこ プロフィール

1969年 名古屋大学医学部 卒業
医師免許取得
1977年 名古屋大学医学部大学院論文博士号取得750号

研究経歴

1970年 名古屋大学医学部産婦人科教室 入局
1977年 名古屋大学医学部産婦人科講座 助手
1981年 名古屋大学医学部産婦人科 講師
1993年 名古屋大学医療技術短期大学部看護学科 教授
1997年～ 名古屋大学医学部保健学科 看護学専攻 教授

研究分野

婦人科癌、ジェンダーストレス、自律神経システム、女性の抑うつ、性差医学

はなかった。我々は、このジェンダーに関わるストレス・プロセスに注目し、これをジェンダー・ストレスと名付け、ジェンダー・ストレスに関わる心理社会的、生物学的知見を、文理複合研究により、整理・統合し、ジェンダー・ストレス・モデルの構築を目指す。将来は各々の性に適した行政および医療レベルでの施策の提言を考えたい。

この研究では、ストレスが様々な疾病を引き起こすメカニズムの解明を目指しており、とりわけ、男女におけるストレス反応の差異と類似性に着目し研究を行うものである。下図に示すように、個人の有する生物学的要因(性差など)と心理学的要因(養育体験など)に、環境からのストレスが加わると、生体に短期的な一次反応としての生理的・情動的反応が誘起され、さらにこの状態が継続することにより、二次反応である長期的反応が引き起こされる。ここでは、男女間の異質性を特徴づける女性ホルモンの変動期を対象に取り上げる。女性の場合、月経前緊張症、妊娠・産後うつ病、更年期障害などが特徴的な長期反応である。我々は、これらの個人要因、環境要因、ストレス・プロセス、ストレス反応のすべてにおいて、ジェンダーが重要な要因であり、これらが相互に影響を及ぼし合うとの認識に立ち、医学、生理学、分子生物学、心理社会的な手法を駆使した文理複合研究により、ジェンダー・ストレス・モデル構築を目指すものである。名古屋大学は全国に先駆けて、「親と子の心療部」が設置され、本大学において文理複合研究による本研究の持つ意義は大きい。

現在、日本社会には多くのストレスが満ちているが、ストレスが関連すると思われる疾患に関しても、男性に多い不登校、心筋梗塞、女性に多い摂食障害、抑うつといったように、性別による違いは明らかである。その差異については、心理社会的に

は男女を取り巻くジェンダー観を中心とする社会的環境が原因であると論じ、一方、生物学的にはストレスへの反応性の生物学的差異(性差)であると論じている。このため、心理社会的、生物学的介入はどちらの性にとっても十分なもので

